



外務省日誌

自明治四年
 至同五年
 第一號
 第五號

特別
 力5
 4299
 2



門力5
號 4299
卷 2



卿		大輔		少輔		大丞		權大丞	
官員		官員		官員		官員		官員	
月中		月中		月中		月中		月中	
庚午十月十七日叙任	庚午十月十七日叙任	己巳四月十九日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任	己巳七月八日叙任
從六位守藤原朝臣健明	從五位守源朝臣作樂	從四位守藤原朝臣宗則	從三位守清原朝臣宣嘉	從四位兼行文書正藤原朝臣前光	從五位守橘朝臣正隆	從五位守橘朝臣正隆	從五位守橘朝臣正隆	從五位守橘朝臣正隆	從五位守橘朝臣正隆
中野	光山	寺島	澤	柳原	楠本	楠本	楠本	楠本	楠本

早稲田大學 圖書館
藏 30.6.8 雙
藏 書

少錄	出仕	權大錄	出仕	出仕	權大錄	出仕	出仕	少錄
庚午三月二日任	庚午四月十三日任	庚午三月二日任	庚午四月十三日任	庚午三月二日任	庚午四月十三日任	庚午三月二日任	庚午四月十三日任	庚午三月二日任
源	藤原	源	藤原	源	藤原	源	藤原	源
繁信	知一	繁信	知一	繁信	知一	繁信	知一	繁信
加藤	齋藤	加藤	齋藤	加藤	齋藤	加藤	齋藤	加藤
廣津	廣津	廣津	廣津	廣津	廣津	廣津	廣津	廣津
上田	上田	上田	上田	上田	上田	上田	上田	上田
遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤
伊東	伊東	伊東	伊東	伊東	伊東	伊東	伊東	伊東
森山	森山	森山	森山	森山	森山	森山	森山	森山
渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊
品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川
兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道	兼通商大佐源忠道
藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原
麗正	麗正	麗正	麗正	麗正	麗正	麗正	麗正	麗正
齋藤	齋藤	齋藤	齋藤	齋藤	齋藤	齋藤	齋藤	齋藤
清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任	清國 庚午九月四日任
朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日	朝鮮 庚午九月十八日
石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任	石狩 己巳八月廿八日任

大錄	出仕	權少丞	少丞	出仕	權少丞	少丞	出仕	大錄
己巳七月廿二日任	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿七日	己巳七月廿二日任
源	無位源	無位藤原朝臣昌吉	無位藤原朝臣昌吉	無位源	無位藤原朝臣昌吉	無位藤原朝臣昌吉	無位源	源
義一	朝臣直寬	朝臣景孝	朝臣景孝	朝臣直寬	朝臣景孝	朝臣景孝	朝臣直寬	義一
藤原	佐田	柴田	柴田	佐田	柴田	柴田	佐田	藤原
水野	水野	水野	水野	水野	水野	水野	水野	水野
官本	官本	官本	官本	官本	官本	官本	官本	官本
田邊	田邊	田邊	田邊	田邊	田邊	田邊	田邊	田邊
花房	花房	花房	花房	花房	花房	花房	花房	花房
吉岡	吉岡	吉岡	吉岡	吉岡	吉岡	吉岡	吉岡	吉岡
石橋	石橋	石橋	石橋	石橋	石橋	石橋	石橋	石橋
大庭	大庭	大庭	大庭	大庭	大庭	大庭	大庭	大庭
柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田	柴田
佐田	佐田	佐田	佐田	佐田	佐田	佐田	佐田	佐田
藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原
義一	義一	義一	義一	義一	義一	義一	義一	義一
藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原	藤原
朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任	朝鮮 庚午七月十二日任
庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任	庚午閏十月廿二日任
庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日	庚午閏十月廿七日
己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任	己巳七月廿二日任

庚午六月廿九日任	源	俊	章	高嶋
庚午八月廿四日任	藤原	忠	順	内藤
庚午九月十日任	越智	廣	暢	河野
庚午九月十二日任	源	盛	直	横田
庚午九月十二日任	藤原	祐	繼	伊東
庚午十月十日任	平	直	道	遠藤
庚午十月十日任	藤原		齊	有住
庚午十月十五日任	源		清	萱原
庚午十月十五日任	源		菜	山口
庚午十月廿五日任	源	信	乃	神代

少令史

庚午十月三日任	藤原	守	蔭	目賀
米國行 庚午閏十月十四日任	源	信	敏	大田部
庚午十月十五日任	藤原	好	風	官本
庚午十月十七日任	張	武	雅	清河
庚午十月十七日任	劉	中	平	彭城
庚午十月十七日任	藤原	麟	之	石崎
庚午十月廿四日任	源	貞	吉	土取
庚午五月十四日任	源	正	厚	石川
庚午五月十四日任	源	義	弁	朝日
庚午五月十四日任	鄭		環	高麗

エドワルト、バウキール

大貌列顛國領事

エスゼ、ロウドル

荷蘭國領事

ウエ、フィンデル、タック

獨逸北部聯邦領事

エ、ライス

葡萄牙國領事

エドワルド、ロレーロ

白耳義國領事

エルストロース

伊太利國領事

シ、ロベーチ

米利堅合衆國領事

レ、ミュール、ライオン

佛蘭西國領事代

デ、ラペロース

大坂在留領事

大貌列顛國領事

エブル、エジガウル

荷蘭國副領事

ウキ、イ、ピス

兵庫在留領事

荷蘭國領事

アイト、ホートイン

佛蘭西國副領事

エー、ジンダロス

荷蘭國副領事

ウキセ、コルトハルス

丁抹國副領事

エツチパラノ

米利堅合衆國副領事

ポール、フランク

大貌列顛國代辦副領事

ゼ、ゼ、エンスリ

獨逸北部聯邦領事代

エ、イウルフ

伊太利國領事代

エツチゼグルース

長崎在留領事

米利堅合衆國領事

ダフリユピマン

荷蘭國領事

エスピトムブリンク

魯西亞國領事

フリツペウス

佛蘭西國領事

リョングエリ

葡萄牙國領事

ゼトロレーロ

獨逸北部聯邦領事

アルリンドウ

瑞西聯邦領事 荷蘭國領事ヨリ兼帶

丁抹國領事

エツチツフ

大親列顛國代辦領事

エ、エ、エン子スリ

澳地利國領事
兼帶
大貌列顛國代辦領事ヨリ

箱館在留領事

大貌列顛國領事

アル、ユースデン

獨逸北部聯邦領事

シガルト子ル

丁抹國領事

ゼエツ、チユース

米利堅合衆國領事

イ、イライス

魯西亞國代辦領事

エス、タラフテンベルク

佛蘭西國領事代

ゼエツ、チユース

奧地利國領事
大貌列顛國領事ヨリ兼帶

新潟在留領事

大貌列顛國領事

ゼームスツループ

獨逸北部聯邦領事

エ、六ライス子ル

荷蘭國副領事

メース

外務省日誌

明治四年辛未第壹号

自正月十日元日

正月元日 洋曆一千八百七十一年第二月十九日

○米利堅合衆國公使ノ來翰

貴國新年ノ慶賀愛度申納候然ハ拙者祝詞ノ
趣

天皇陛下ハ宜ク御奏 聞有之度希候方今貴

國太平無異殊ニ當日陽氣温和ヲ徴シ

天皇陛下ハ素ヨリ政府及ヒ閣下ノ安寧ナラ

ンヲ深ク致期望候右年甫御祝詞申述度如

斯御座候謹言

西洋千八百七十一年第二月十九日

米利堅合衆國特派全權公使

チャールズ・イ・ダロング

外務御

外務大輔

閣下

他各國公使ヨリモ同ク祝詞ヲ出ス今略之

○米利堅合衆國公使ノ來翰

以書翰申入候然ハ本國事務宰相ハミルトン

氏ヨリ先便飛脚船ヲ以テポルトメン氏ノ代

職タルベキ人物ヲ撰ミ命ズベキ旨命令有之

候間即チジュー・シム・ヘポイン氏ヲ撰ミ公使館

書史兼譯司ヲ命シ候尚本國ヨリ後命有之候

迄右御承知有之度此段可得貴意如此御座候

以上

米利堅合衆國特派全權公使

第二月十九日 チャールズ・イ・ダロング

外務御

外務大輔

四日

閣下

政始メ例年ノ式ノ如シ御大輔參
 朝言上アリ左ノ如シ
 御維新以來萬機漸整ト雖トモ各國ノ條約猶
 未夕舊貫ニ因襲セリ幸ヒニ明年改定ノ期ナ
 ルニヨリ各國公使ト討論商議シテ至當ノ公
 法ヲ確定スル事職ヲ臣等ニ之レ由ル故ニ先
 臣等各國ノ條約ヲ檢出シ廣ク公議ヲ採リ豫
 メ上裁ヲ仰キ以テ明年論議決定ノ地步ト

ナサシトヲ臣等謹テ仰望スル所ナリ

外務御臣清原宣嘉

外務大輔臣藤原宗則

○獨逸北部聯邦譯司ノ來翰

以手紙啓上致シ候然ハ貴國南校ニ於テ被相
 雇候我國教師ホルツ氏一昨日當港へ到着致
 シ候間兩三日中ニ同人ヲ召連レ外務御同大
 輔閣下并ニ外御方へ御引合セ申度存候尤過
 日御頼相成候我國學校規則書ヲ我國學校執
 政ヨリ同人へ託シ越シ候間右規則書別紙差

進シ申候此段可得御意如此御座候以上

西洋千八百七十一年第二月二十二日

獨逸北部聯邦公使館譯司

ケンブルマン

外務大少丞

責下

但規則書別紙略ス

八日

○外務權大録近藤真鍮任文書權大佑

○秋月藩坂田諸遠任文書權大佑

○外務權少録津久井遠任文書少佑

○豊津藩副田節文書司十三等出仕

○中濱萬次郎歸着并別紙

私儀去八月横濱出帆洋中ヨリ病氣ヲ發シ療

治ナガラ「ロンドン」迄罷越シ醫藥手當等致シ

候へ共快氣ノ見据モ無之同行ノ諸藩士衆評

ニ任セ歸着仕候間此段御届申上候

辛未正月八日 中濱萬次郎

○佛都巴里斯降參ニ付新聞紙抜書左ノ如シ

千八百七十一年第一月二十九日ノ新聞紙ニ

日夕本月二十七日戌十七日ニ佛ノ外國事務總裁

ハブルト申者普ノ先陣ニ到リ同國宰相ビエス
 マークト和睦ノ應接左ノ如シ
 一是迄佛ノ領地タルアルシエシ及ビプロレシ
 兩州ヲ讓リ外ニ軍艦ニ拾艘并洋銀四拾萬々
 フランクノ入費ヲ佛ヨリ普へ償フ事ヲ定約
 シテハブル儀巴里斯へ歸リタリ
 一佛ノ一方ノ大將ホーバケト申者敗戦ノ上自
 害セシト云へリ
 一普兵ヨリ佛ノ城内へ發砲ニ付害セラル者
 百六十人ナリ内男子七十二人女子四十九人

小兒三十九人
 一佛府兵士和睦ヲ請フ處終ニ二十萬人ノ所持
 銃筒ヲ投シ降參ヲナセリ依テ府外ノ砲臺皆
 普兵ニテ取守リタリ
 一我十二月四日ヨリ同月二十四日迄ノ間休戦
 ス其期日ニ至リ和議ナサバル時ハ佛九十萬
 人ノ兵ヲ以テ再戦ニ及バント云へリ
 一佛ノ一方ノ大將ガンバタ曰ク假令巴里府降
 伏スト雖モ同人ノ戦ハ止事ナシ然レ共同人
 及ヒ兵隊共伊太利亞國へ進入セシト云又一

説ニハ同人自殺セリト云フ

○西班牙國王即位ノ儀ニ付來翰并別紙

今般アオスト侯西班牙國ノ即位ノ事ニツキ

マドリ侯ヨリ同國民へ告文ノ寫シ此方ヨリ

貴國へ相達スヘキ様同マドリ侯ヨリ申來候

間則別紙相進シ申候此段宜シク御奏シ被

成下度御座候謹言

西洋千八百七十年第十二月十一日

瑞西ニ於テ

シヨイジヤルロ

外務御

外務大輔

閣下

別紙

西班牙人民へ

千八百三十三年ニ於テ西班牙王位ニ女子ヲ

居タル所ノ變革今躬ヲ其政權ヲ敗テ更ニサ

ホア家ノ一公ヲ奉シテ國王トセンヲ希願

スルニ至ル

夫我家ハ王位ニ即ヘキ正家也故ニ昔サルデ

又國シヤールアルベルモ我祖先カルロス公
ヲ西班牙正系ノ王トシ且其後ヒクトルム
マルノ未夕伊太利王ト稱セサル時ニモ亦我
伯父モントモウレニ公ヲ同ク正系ノ西班牙
王ト唱ヘリ然ル處當時アメデ公ハサボア家
ノ讓ヲ曲テ恣ニ王位ニ登リ且新伊太利ノ裁
判ヲ請フヲモ更ニ望マス且其從事スル所
ノ百九十一人ノ者ハ盡ク諸州ノ集會ノ名代
人ニモ非スシテ定律政ヲ口實トシ以テ隨意
ニ彼アメデ公ヲ王位ニ奉セリ故ニ我曰ク此

ノ不義ヲ辨論シテ將ニ篡奪ノ各國ニモ延蔓
センヲ恐懼セシメ且我施ス所ノ恩義ニ國
民ヲシテ感動セシメシメシメシメシメシメ
西班牙ノ法典即位ノ律ハ必ス王ノ正系ニ定
ルモノ也然レ今之ヲ曲テ不用ハ則喪乱ヲ釀
ス者ナルカ故ニ敢テ我家族并各國正道ノ人
ニ辨論ス
西班牙ハ從來羅馬教ヲ尊崇スル人民ナルヲ
今コレヲ捨テ邪教ヲ奉シ且正系ノ君ヲ除テ
異ル王ヲ立ント欲スル者ハ豈何人ト云ニ哉

故ニ我レ敢テ報國ノ人民ニ辨論ス
 蓋シ夫ノ仕方無道ニアルニモ非ス異政ヲ建
 ルニモ非ス唯我一身ノ權ニ關スル儀力或ハ
 我カ此ノ權ヲ捨テ民ヲ拯フノ儀ニ關セハ我
 豈一身ノ權ヲ捨ルヲ惜ミ痛シ哉然レ權及
 道ニ二路アルニ非ス則西班牙ノ利ハ即チ我
 利ニシテ猶正系ノ君ハ即チ民ノ利トナルカ
 如シ故ニ彼ノ變革ヲ欲スル者ハ唯々時風ヲ
 好ム惡黨ニシテ其原因政體ノ神權ヲ廢シ且
 人民焉ニ法ルヘキ教道ヲ類ント欲スルニア

リ是ノ如キハ實ニ我歎スル所ニシテ敢テ我
 民國及ヒ正道ノ各國ニ辨論スル所也願クハ
 國民我汝ニ心ヲ傾ルカ如ク汝亦心ヲ我ニ傾
 テ共ニ正ニ復センヲ
 西洋千八百七十年第十二月八日
 ツールニ於テ
 カルロス
 九日
 ○大貌列顛國公使ノ來翰
 以手紙致啓上候然ハ昨年四月頃我國水師提

督ホンベノ氏附属ノ軍艦へ乗組候貴國士官
 伊月一郎儀此度「ホ」ツノ以表番泊ノ主船へ
 乗組セ号令官ノ職ニ充テ申候依テハ算學并
 ニ航海學同所海軍學校ニ才イテ執行有之且
 造船場其他諸軍器備へ置候場所等モ見分サ
 セ差支無之様別段取計ヒ申候將又航海術實
 地ニ就相學候様今般「ヘ」キリ「ハ」ト申甲鉄
 船へ移シ乗組セ候右ノ趣可得御意如此御座
 候以上

大貌列顛國特派全權公使

正月九日 ハルリパークス

外務卿 外務大輔

閣下

十日

○外務史生齋藤素成任權少録

附錄

○漢語稽古所出來次第近日開學ノ事

別紙但舊年諸官

今般當省ニ於テ漢語通辨ノ稽古取開キ候ニ
 付年齡十一二歳ヨリ十五六歳マテニテ可也
 手跡ニ出來且學庸論孟ノ素讀出來候テ有志
 ノ者有之候ハ、子弟厄介ノ差別ナク當人ヨ
 リ直ニ當省へ願出候様御申達可被成候此段
 申達候也

庚午十月二十四日

外務省

○漢洋語學所

分課

督長

語學所諸事ヲ總理スルヲ掌ル

教導

生徒ヲ教育シ語理學術ヲ傳授スルヲ掌ル

守事

語學所事務ヲ監察シ並ニ金銀出納管繕等

ヲ掌ル

教佐

教導ヲ佐テ生徒ニ教授スルヲ掌ル

助讀

教佐ヲ補ヒ生徒ヲ教授スルヲ掌ル

塾頭

入塾生徒ヲ管シ並ニ外來生徒ノ勤怠ヲ監

視スルヲ掌ル

塾佐

掌ルヲ塾頭ニ同シ

掌簿

官籍ノ出納教官以下出席ヲ書記スルヲ掌

小使
ル

○漢語學所分課

督長
文書權正 鄭永寧

全兼教導
文書大佑 穎川重寛

教導
文書少佑 蔡祐民

守事
文書權大佑 近藤眞鋤

全
外務權少録 土子豊憲

全
外務權少録 齋藤素成

教佐
文書權少佑 周道隆

全
文書大令史 清河武雅

全
文書大令史 彭城中平

助讀
文書大令史 石崎肅之

塾頭

塾佐

掌簿

○本省ニ於テ近日英佛日耳曼語學開場ニ相成

候ニ付本省官員子弟第厄介ノ内年齢十一歳ヨ

リ十七歳迄有志ノモノハ稽古可願出學業等

試験ノ上入學被差許候事

但規則書ハ別冊ニ在リ今略之

○洋語學所官員

督長 外務權少丞 石橋政方

全 文書權正 子安宗峻

教導 文書權大佐 近藤真鋤

守事 外務權少錄 土子豊憲

全 外務權少錄 齋藤素成

全 外務權少錄 齋藤素成

教佐 文書大令史 土取貞吉

助讀 文書大令史 土取貞吉

全 兼 塾 佐 文書司出仕 石野則彌

塾 佐 文書司出仕 榎本忠恕

掌 簿 文書司出仕 岡田道治

全 文書司出仕 岡田道治

右庚午十二月二十六日署定

外務省日誌 明治四年辛未第二号 自正月十二日至三月十日

正月十二日 洋曆一千八百七十一年第三月二日

○在大貌列顛國御雇士官バロシ、フォン、シー、ポルトノ來翰

以手紙致啓上候然ハ昨年第八月中貴國留學生ノ模様探索可致旨且以後ハ右修行ノ事ヲ差圖シ其費用ヲ節スベキ旨町田氏ヲ以テ拙者へ御下命有之候ニ付既ニ右趣意ヲ以テ要用ノ金高ヲ東洋為替屋へ相渡置申候然ルニ

拙者倫敦へ到着ノ後兼テ御下命ノ通り不取
 敢音見清兵衛方へ人ヲ遣シ閣下ヨリ拙者へ
 御委任有之候權義ノ趣逐一報知致シ閣下ヨ
 リ御渡シ相成候書類ヲ同人へ相示シ候処同
 人拙者ノ權義ヲ遵奉スル事ナク既ニ生徒ノ
 取締ヲ命ゼラレタレハ誰ニテモ其上ニ立テ
 事ヲ処スバキ理無之趣説述致サレ候故ニ拙
 者此一件ヲ無事ニ取纏度ト色々盡力致シ候
 へ共見込ノ趣種々齟齬致シ候間拙者不得止
 生徒修行方法等ノ不規則ナル廉々ヲ變革致

シ候儀斷然相止可申候右ハ前以テ閣下へ可
 申出ノ處事情切迫ニ付敢テ獨斷ニ及候不惡
 御承知可被下候扱生徒自己ノ所業ハ格別不
 行跡ニモ無之具修學ノ方法ニ於テハ大ニ不
 規則ニ有之候
 第一藩ヨリ出セル生徒モ當今ノ處ニテハ悉
 ク直ニ朝廷ノ御管轄ト存居候處豈料ラニ
 ヤ政府ヨリ御遣シ相成候生徒ト藩ヨリ出セ
 ル生徒ト共和セズ是レカ為メ種々葛藤有之
 候故ニ右兩生徒ノ儀ハ政府ヨリ御委任有之

候人ニテ悉ク御取締相成候儀方今ノ專要ト
 存候右ノ如ク處置セントナレバ藩々ノ長官
 ヨリ既ニ倫敦ニ留學スル生徒ノ夕メ一ケ年
 凡ソ千ドルノ割合ニテ年々其學費ヲ政府或
 ハ為替屋へ被拂置候様御下命有之度又各藩
 ヨリ新夕ニ生徒ヲ出サント欲セバ其趣願出
 要用丈ノ金ハ政府へ被預置候致シ度存候是
 迄若年ノ人々多分ノ金子ヲ携へ海外へ留學
 スルガ故ニ直ニ之ヲ散財シ其後別段國許ヨ
 リ金子ヲ得ル事ナキヲ以テ大ニ難澁シ鬱々

樂マス其本國ニ對シ大ニ恥辱ノ心ヲ生スル
 ニ至リ申候
 第二英國ノ留學生ヲ管轄スベキ命ヲ受ル人
 ハ其生徒ノ諸費ヲ監督シ生徒ノ費用ハ悉ク
 其手ヨリ拂遣シ候様有之度其他教師ヲ選ヒ
 自費ヲ以テ入學スベキ學校ヲ選ム等ノ事ヲ
 司リ其命ニ隨フ事ナク或ハ行跡不宜モノハ
 直ニ貴國へ送り戻シ可申權ヲ有スベキ儀ト
 存候
 第三當時倫敦ニ留學ノ者ハ大半私ノ教授ヲ

シテ留學生ヲ監督スベキ任ニ當ラザルモノ
ト被存候然ルニ留學生ハ同人ノ管轄ヲ受ク
レハ束縛セラル、事ナク大ニ自由ヲ得ルヲ
以テ却テ其差圖ヲ受ル事ヲ好ミ居申候
第五生徒ヲ管轄スベキ人ハ時宜ニ寄り政府
ヘモ書送スベキ者ナレハ官員ノ列ニ属スル
者ナラザルヲ得ズ決シテ生徒ノ内ヨリ勤ム
ベキ事務ニアラズ右ノ外生徒ヲ管轄スベキ
者ハ外國ノ言葉ニモ熟達シ生徒ヲ教育スベ
キ場所ノ可否ヲモ知ラザルヲ得ズ又此者ハ

受居候ヘハ是カ爲メ是迄多分ノ雜費相カ、
リ候而巳ナラズ生徒自分ノ了簡ニテ其教師
ヲ選ヒ或ハ之ヲ斷ルヲ以テ自分望ム文ヨリ
ハ他ニ學ヒ得ル事ナク或ハ望ム文ヲモ學ヒ
得ル事ナシ音見清兵衛ハ英國ニ居住スル事
今既ニ三ヶ年ノ久シキニ及ブト雖モ英語ヲ
咄ス事モ又書ク事モ出來ザルハ適實ノ一例
ナラズヤ是ヲ以テ後車ノ戒ト可爲ナリ同人
ハ英國ヘ到着ノ後一ヶ月モ教師ヲ選ム事ナ
ク過セシナリ右ノ譯ヲ以テ觀レハ同人ハ決

獨り英國ニ在ル留學生ノ取締ヲナス而巴ナ
 ラズ歐羅巴諸州ニ留學スル生徒ノ方へ順次
 ニ旅行シ其取締ヲモ司ル事肝要ノ儀ト存候
 第六英國へ可遣生徒ハ其齡十六歳ニ過クベ
 カラス可相成ハ猶少年ノ方可然存候其故ハ
 此年齡ニ於テハ國語ヲ學フ事大ニ容易ク加
 之是等ノ年齡ニアツテハ之ヲ統管スルニモ
 甚都合宜シキ儀ニ有之候且長年ノ者ハ語學
 フ修ルトモ格別ノ功ナク是迄モ幼年ニテ海
 外ニ留學スル者ハ大ニ其功ヲ奏シタル儀ニ

有之候
 第七拙者三條公中御門公へ訪問致シ候処兩
 公共御勉強御勤學可有之旨御申聞有之既ニ
 餘程御上達ニモ有之候其他生徒ノ中ニモ大
 ニ勉勵致シ候者有之由ニ付右拙者ノ陳述セ
 シコト々御改革有之候へハ兩三年ノ内ニハ
 必ス歐洲ヨリ有益練磨ノ人々ヲ得ラレ可申
 方今ノ學則ニテハ逆モ成學ノ儀無覺束存候
 後便ニハ英國留學生總体ノ目錄并貴國留學
 生我政府海軍所へ入寮免許ノ儀ニ付我外國

事務局へ拙者ヨリ差出シ候書面ノ寫シヲモ
相送り可申候乍去右入寮ノ儀ハ我海軍局ニ
テ種々差支有之此儀行レ兼候儀ト存候右可
得貴意如此御座候以上

千八百七十年第十二月二十四日

在倫敦

バロンスンシーポルト

外務卿

外務大輔

閣下

十三日

○大貌列顛國公使へ往翰

客歲我閏十月廿九日附貴翰ヲ以テ我國人所
持ノ蒸氣商船航海ノ節楫取并點燈等萬國普
通ノ法ヲ以テ規則可相立旨航海規則書御贈
リ越云々御來示ノ趣致承知候御論說御注意
ノ趣不淺感謝致シ候已ニ兵部民部兩省へ申
達置且右規則書翻譯申付置此節追々翻譯中
ニ付是ヲ以テ照準ト致シ規則取設候積リニ
有之候尤原本ハ今暫ク借用致シ度候乍延引

此段回答可得御意如此御座候以上

辛未正月十三日

外務大輔

外務卿

大貌列顛國特派全權公使

サズハルリ、エス、パークス

閣下

但規則書略ス

○嶋原藩本多阿伎良藤本原姓本省出仕十三等官祿

下賜

○各國公使へ往翰

以手紙致啓上候然ハ我客歲十月廿九日申進

置候我政府ノ造幣寮ニ於テ鑄造致シ候金貨

幣三種ノ内一箇ニ付二圓半ノ價ヲ以テ鑄造

ノ筈取極置候處右ハ銀貨ノ較計相當不致候

ニ付此度再考ノ上一箇ニ付二圓ノ價ヲ以テ

鑄造ノ積改定致シ候間此段更ニ申進候尤其

他ノ種類ハ金銀銅トモ兼テ申進置候通り聊

改更ハ無之候右可得御意如此御座候以上

辛未正月十三日

外務大輔

外務卿

以手紙致啓上候然ハ我今年二月十五日ヨリ
 大坂表ニ取設候造幣寮ヲ公然發開致シ候尤
 鑄造方ハ前同日ヨリ九十日間ハ全ク我政
 府ノ公用ニ供スル而已ニテ内外人民所持ノ
 分ハ改鑄致シ不申候右日數滿限ノ翌日我五
 月十六日ヨリ造幣規則ノ通り内外人民所持
 ノ分ニ鑄造致シ候且新貨幣通用ノ儀モ同日
 ヲリ發行可致候間其段我國在留貴國人民ハ
 御布令有之度存候右可得御意如此御座候以
 上

○各國公使へ往翰

大貌列顛國	伊太利國	白耳義國	米利堅合衆國	佛蘭西國	荷蘭國	獨逸北部聯邦	西班牙國	奧地利國
				公使	閣下			

辛未正月十三日

外務大輔

外務卿

大貌列顛國

伊太利國

白耳義國

米利堅合衆國

佛蘭西國

公使

荷蘭國

閣下

獨逸北部聯邦

西班牙國

奧地利國

尚以テ本文造幣規則書ノ儀ハ進テ差進シ可

申候以上

十七日

○大貌列顛國公使ノ來翰此五返日翰ニ本在月

以手紙致啓上候然ハ去ル十四日各國同列ト

共ニ御面晤ノ節横須賀造船場來ル二十五日

被相開候ニ付拙者同列共招待被致候段喜悅

ノ至リ承知致シ候且造船場已ニ出來ノ上ハ

如何ノ御目的ニ有之候哉外國軍艦而已ナラ

不各國商船モ修復又ハ其他事ヲモ相頼候儀
許容被致候哉將同所ニ於テ貴國ノ公用又ハ
内外ノ私用等相辨シ候哉造製場并ニ器械場
有之候哉承り度右横須賀へ被相設候諸建物
ノ横様本國政府へ申遣シ度候間造船場御開
ノ日限迄ニ委細御報知被仰越候様致シ度存
候右ノ趣可得御意如此御座候以上

千八百七十一年第三月七日

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリパークス

外務御

外務大輔

閣下

○大貌列顛國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ去ル十四日各國同列ト
共ニ御面晤ノ節横須賀造船場來ル二十五日
被相開候ニ付拙者同列共招待被致候段喜悅
ノ至リ承知致シ候且造船場已ニ出來ノ上ハ
如何ノ御目的ニ有之候哉外國軍艦而已ナラ
ズ各國商船モ修復又ハ其他事ヲモ相頼候儀

許容被致候哉將同所ニ於テ貴國ノ公用又ハ
内外ノ私用等相辦シ候哉造製場并ニ器械場
有之候哉承リ度右横須賀へ被相設候諸建物
ノ模様本國政府へ申遣シ度候間造船場御開
ノ日限迄ニ委細御報知被仰越候様致シ度存
候右ノ趣可得御意如此御座候以上

千八百七十一年第三月七日

大貌列顛國特派全權公使

サズハルリパークス

外務御

外務大輔

閣下

○大貌列顛國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ昨年貴國三月頃水師亞
提督ホルンベ附属ノ軍艦へ乗組候海軍生徒
兩人ノ内前田十郎左衛門儀先達テ自殺被致
候不幸ノ致心痛ノ至リニ存候就テ我外務執
政ヨリ被命別紙亞提督ホルンベ船將ハフキ
ンズ其他「リール」ナル船諸官員ヨリノ來書
寫差進申候右ノ趣ニテハ斯ク可惜所業ニ相

成候原由ヲ案スルニ同人儀狂氣相發シ他ノ
 貴國人同船ニ替入罷在始終同人ノ進退ヲ伺
 居候間牒ノ者有之様ニ被相心得候ニ付亞提
 督ホルンベ其他ノ官員ヨリ種々説諭致シ候
 處更ニ了解無之昨九月十二日晚同船「バヒヤ
 入港ノ處同十三日未明ニ自殺被致候事ニ御
 座候隨テ同人所持ノ諸品等委細目錄書別紙
 ニ差進申候右所持ノ中賣拂候品又ハ殘シ置
 候品ノ目錄「バロニン「シ「ボルトヨリ差出
 シ候間其寫ニ差進申候右賣拂代金并殘シ置

候品且死人所持ノ金子二百五十四パウンド
 ハシリンニ半ペンヌ最早龍動府東洋為替屋
 へ相預置候間此上如何取許可申哉承度存候
 右ノ趣可得御意如斯御座候以上
 千八百七十一年第三月七日
 大貌列顛國特派全權公使
 サズハルリ「パークス
 外務御
 外務大輔
 閣下

但別紙諸官員來書略ス

○大貌列顛國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ貴國昨十一月八日附ノ

書翰ヲ以テ申入候我國軍艦「シルブイ」來ル

二十二日前後ニハ横濱へ到着可致尤北海道

測量ノ儀ハ來月十二日頃出帆早速取懸リ申

候筈ニ有之依テ貴政府ニ於テ「シルブイ」同

道ノ爲メ被命候船名并乗組ノ士官姓名被申

越度且前同日ノ書簡ニテ申入候通り手配被

致候哉就中右入用ノ石炭拙者ヨリ申入候各

所ニ於テ既ニ御貯有之候哉承リ度存候萬一

今以相調不申候ハ、無邊滯用意被致候様早

速其筋ハ被命來月十二日迄ニ無相違諸事可

相整旨斷然被仰越度候右ノ趣可得御意如此

御座候以上

千八百七十一年第三月七日

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリパークス

外務卿

外務大輔

閣下

○伊太利國公使ノ來翰

以手紙致啓上候今般拙者儀清國北京ノ事務
 ニテ當公使館書吏同道致シ近日ノ内貴國ヨ
 リ彼地へ出帆可致候右ニ付我政府去ル千八
 百七十年第七月五日附書簡ヲ以テ申越拙者
 留守中ハ貴國在留我國領事カウアリエレキ
 リストフルロベッキ當分伊太利國代理公使心
 得委任ノ命有之候間此旨閣下へ報知致シ候
 然ル上ハ同人右ノ任名ヲ以テ交際事務ノ職

1030 (YH特製)

當公使館ニ於テ相勤申候故前々ノ通カウア
 リエレロベッキへ御厚意被下度相願候猶同人
 職分行届候様御引立ノ儀希望致ス所ニ御座
 候此旨得御意度如此御座候以上

千八百七十一年第三月七日

伊太利國特派全權公使

コントアレサンドロ、エ

外務卿

外務大輔

閣下

○伊太利國公使ノ來翰
 以手紙致啓上候今般拙者儀清國北京ノ事務
 ニテ當公使館書吏同道致シ近日ノ内貴國ヨ
 リ彼地へ出帆可致候右ニ付我政府去ル千八
 百七十年第七月五日附書簡ヲ以テ申越拙者
 留守中ハ貴國在留我國領事カウアリエキ
 リストフルロベッキ當分伊太利國代理公使心
 得委任ノ命有之候間此旨閣下へ報知致シ候
 然ル上ハ同人右ノ任名ヲ以テ交際事務ノ職
 當公使館ニ於テ相勤申候故前々ノ通カウア

1030 (YH特製)

リエレロベッキへ御厚意被下度相願候猶同人
 職分行届候様御引立ノ儀希望致ス所ニ御座
 候此旨得御意度如此御座候以上
 千八百七十一年第三月七日
 伊太利國特派全權公使
 コントアレサンドロ、エ
 外務卿
 外務大輔
 閣下
 廿日

○伊太利國公使へ返翰
 御手紙披見致シ候今般閣下御儀清國北京ノ
 事務ニテ當公使館書史御同道被成近日ノ内
 當地ヨリ彼地へ急速御出帆相成候ニ付貴政
 府ヨリ去ル千八百七十年第七月五日附御書
 簡ヲ以テ閣下御留守中ハ我國在留貴國領事
 カウアリエレキリストフルロベッキ貴國代理
 公使心得ノ御役儀委任ノ命有之候間此旨拙
 者共へ御通達被成候然ル上ハ御同人右ノ任
 命ヲ以テ交際事務ノ職貴國公使館ニ於テ御

1030 (YH特製)

勤被成候故前々ノ通カウアリエレロベッキ氏
 へ御交通可申旨御申越ノ趣委細致承知候右
 御答可得御意如此御座候以上
 辛未正月廿日 外務大輔 外務卿
 伊太利國特派全權公使
 コントアレサンドロフェ
 閣下
 ○静岡藩山内勝明任文書少佐藤本原姓
 廿四日

○大貌列顛國公使へ返翰來在翰九日

我正月九日附御書翰致落手候然レハ伊月一

郎儀既ニ^レホ^レツメ^レ込表番泊ノ主船号令官次

官ノ職ニ被充候ニ付算學航海學等同所海軍

學校ニ於テ修業致シ且造船場其他諸軍器被

備置候場所等見分ノ儀差支無之様別段御取

計被下且又今般航海術實地ニ就キ學ヒ候為

メ^レハ^レキリ^レ込ト申甲鉄船へ轉移ノ儀御申

越ノ趣承知致シ候右ハ格別ノ御注意ヲ以テ

同人御引回シ被下候儀ニ付速ニ學術進歩致

1030 (YH特製)

シ候ハ必然ノ事ト存候右謝詞可然貴國海軍

學校長官へ御通達有之度御頼申入候此段回

答如此御座候以上

辛未正月廿四日

外務大輔
外務御

大貌列顛國特派全權公使

サズハルリ^レエス^レバ^レク^レス

閣下

○文書司出仕中根紅雪源本姓轉大舍人局出仕

○外務少丞水野良之金澤大聖寺富山三藩へ出

張被仰付

○外務史生嘉山昆篤外務少丞水野良之附屬三

藩へ出張被申付

十五日

○大貌列顛國公使へ返翰

御手紙致披見候然者本月廿五日横須賀造船

場相開候ニ付外國軍艦商船修覆其他事共貴

國ヨリ頼ニ應シ許容可致哉且又内外ノ別ナ

ク私用等相辨可申哉并製造場器械場等ノ模

様御尋ノ旨承知致シ候即チ工部省へ相達候

處軍艦商船修覆其他事共御頼被成候ハ、夫

々相辨可申候へ共方今我軍艦ノ内修覆ヲ要

スル船多數ニ付當分ノ處ハ差支候由將又蒸

氣釜製造所鐵器類鑄造場細打所帆縫所等ハ

致出來居候へ共諸器械仕揚場ハ當時据付中

ノ趣其外引揚ドック掘ロドック共己ニ相備リ造

船所モ二ヶ月相開有之候條同省ヨリ返答申

越候此段御報可得御意如此御座候以上

辛未正月廿五日

外務御

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリ、パークス

閣下

○外務大録渡邊洪基任文書權正叙從七位

廿七日

○外務權少録宮木鳴漢洋語學所守事被申付

廿八日

○文書少佐諸岡通義洋語學所教佐被申付

晦日

○外務權大録上田峻新潟出張被申付

○米利堅合衆國サンフランシスコ在留

大日本領事ブルースへ往翰并達書

以手紙致啓上候然ハ我國人數多渡海ノ節不

一方御勉勵御周旋有之紋相聞工政府ニ於テ

別紙之通褒賞ノ御沙汰有之候ニ付即チ及御

達候就テハ以來別而御注意有之候様外務御

閣下ヨリ被命候且伊藤大藏少輔先般米利堅

國へ到着并永井五百介歸國ニ付テハ最モ厚

ク御世話有之候條大藏少輔ヨリモ申越逐一

致承知忝次第ニ存候同人共儀ニ付第二月一

日附ノ貴書相達委曲致承知候別段不及回答

候條御諒恕有之度候以上

明治四年辛未正月晦日 外務大少丞

サンフランシスコ在留

大日本領事

ブルークス

貴下

追啓本文手當金増加ニテ壹ケ年ノキシコ
銀ニ千枚ノ内本年半ケ年分千枚此度差送
リ候間御落手可有之候以上

同人へ達書

チルレスウォルコトブルトクス

其方儀御國人数多致渡海候節周施行届候ニ
付先達テ一ケ年千^{元宛}元宛賞金下賜候処其後不
一方勉勵ノ聞エ有之更ニ千元加増合セテ一
ケ年二千元宛下賜候事

明治四年辛未正月

大政官

○大貌列顛國公使へ返翰

我正月十七日附ノ貴翰落手致披見候然ハ客
歳三月中世界周覽ノ貴國軍艦ニ乗組候海軍
生徒前田十郎左衛門儀自殺致候ニ付右顛末

書船將其外諸官員ヨリノ來書寫共添御申越
 ノ趣致承知候右ハ全ク當人胸懷逼迫ナルヨ
 リ精神錯乱發狂自殺致セシ段拙者共ニ於テ
 亡相違有之間敷ト考定致シ候然ル處船將初
 其他ノ官員厚ク説諭致サレ加之自害ノ節ニ
 臨ミ醫療等篤ク差加ラレ候ハ共其詮ナク死
 去致シ船將初諸官員ハ不慮ノ御配意御手数
 相掛ケ候段深ク感謝スル所ニ候右ハ段同艦
 船將初諸官員ハ可然御通達被下度就テハ當
 人埋葬其外ノ諸入費何方ニテ御仕拂相成候

哉返辨致シ度候間巨細御申越有之候様致シ
 度將夕當人所持ノ品物目錄書中ノ内賣却被
 致候品又ハ殘置候品物フオンニ一ホルト氏ヨ
 リ差出候書面是又落手右賣拂代金并殘置候
 品金子等ハ貴國東洋為替屋ハ被預置候趣右
 品物ハ不殘賣國在留鮫嶋少辨務使ハ御引渡
 有之候様幸便ノ節御通達被下度尤同人ハ亡
 委曲申通候積ニ御座候此段回答旁謝申入度
 如此御座候以上

辛未正月晦日

外務大輔

外務御

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリ、パークス

閣下

○在英國御雇士官バロニンシーホルトへ返翰

西曆千八百七十年第十二月廿八日附ノ書翰

我明治四年辛未正月十三日到着致披見候然

ハ世界周覽ノ英國軍艦へ乘組居候我海軍生

徒前田十郎左衛門儀航海中發狂遂ニ同艦ニ

於テ自殺致シ候一件ニ關係セル數通ノ書翰

落手致披見候処當人種々想像ノ餘リ精神錯

乱發狂自殺致シ候事ト相見へ愍然ノ事ニ存

候就テハ右事件新聞紙ニテ承知被致早々海

軍局ロルドシヨンへハ氏及ヒ英國外國事務

臣相ハンモント氏方ハ被相越候處兩氏懇篤

可及報知旨ニテハンモント氏ヨリ別紙ノ數

通貴下へ差進候貴下他行中ニテ歸着ノ上同

氏へ返翰被差遣候往復書類共被差越披見彼

是ト御配慮有之候段謝スル所ニ候且當人所

持ノ物品等處置方ノ儀御申越有之候處當今

鮫嶋少辨務使其他在留ニ付同人取計候様更
ニ申遣候間別段御配慮ニ及ビ不申候乍併尚
御心附ノ廢モ候ハ、同人へ御報知有之度ハ
夕前件巨細ノ事情相分り次第後日御申越可
有之旨且伊月一郎其他海軍學生無恙到着致
シ候旨ノ兩條致承知候此段回答可得御意如
斯候以上

辛未正月晦日

外務大少丞

在倫敦

アレキサンドル、バロンフォン、シーホルト

貴下

附錄

○漢洋語學所揭示

語學所開立ノ趣意ハ人材ヲ教育シ專ラ翻譯
 通辨ノ業ニ熟セシメ外國交際ニ便ナラシム
 ルニ在リ故ニ生徒篤ク此旨ヲ體認シ勉勵研
 學可致事
 一大義名分ヲ標的トシ内外ノ辨別ヲ失セス常
 ニ禮讓ヲ正シ喧嘩等致スベカラサル事
 一督長教導等ノ指揮ヲ遵守シ違背致スベカラ
 サル事

辛未正月

外務省

二月

官員

御

己巳七月八日任

從三位守清原朝臣宣嘉 澤

大輔

己巳七月八日任

從四位守藤原朝臣宗則 寺島

少輔

大丞

庚午十一月廿九日任

從四位兼行文書正藤原朝臣前光 柳原

戊辰閏四月廿二日任

權大丞

庚午八月十八日任

從五位守橘朝臣正隆 楠本

己巳九月二日任

從五位守源朝臣作樂 丸山

庚午十月十七日任

正六位守藤原朝臣健明 中野

權正

庚午五月十二日任
己巳十月十八日叙

從七位守鄭

永寧鄭

庚午五月十二日任
己巳十月十八日叙

從七位守橘

朝臣宗峻 子安

辛未正月廿五日任
辛未正月廿五日叙

從七位守藤原朝臣洪基 渡邊

各國官員

大貌列顛國特派全權公使

サア、ハルリ、エス、パークス

書史

フランシス、オツチウキル、アダムス

大日本事務書史

エル子スト、サトウ

伊太利國特派全權公使

コント、アレサンドロ、フェ

白耳義國特派全權公使

オーゴスト、フキントロ、デンヘーキ

米利堅合衆國特派全權公使

チャールズ、イ、デ、ロング

代辦書史兼譯

シエ、ヘッボン

佛蘭西國全權公使

マキシム、ウートレー

書史

コントデベアル

譯司

ジブスケ

荷蘭國辦理公使

エスペーファン、ドル、ブーフエン

書記

ドンクル、キユルシユス

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フォン、ブラント

譯司

クンプルマン

西班牙國代理公使

ヘブレ、ス、ロドリゲ、ジエ、ム、ノズ

奧地利國代理公使

エツチカリース

橫濱在留領事

瑞西聯邦總領事

シ、ブレインワルト

丁抹國總領事

エドワルド、バウキール

大貌列顛國領事

エスゼロウドル

荷蘭國領事

ウエファンデル、ダック

獨逸北部聯邦領事

エドワルド、ライス

葡萄牙國領事

エドワルド、ロレーロ

白耳義國領事

エルストロース

伊太利國領事

シロベーチ

米利堅合衆國領事

レミエール、ライオン

佛蘭西國領事代

デラペロース

大坂在留領事

大貌列顛國領事

エブルエジガウル

荷蘭國副領事

ウキイノピス

兵庫在留領事

荷蘭國領事

アイルボードイン

佛蘭西國副領事

ユージングロス

荷蘭國副領事

ウキセノコルトハルス

丁抹國副領事

エツチパラノ

米利堅合衆國副領事

ポールフランク

大貌列顛國代辦副領事

ゼゼエンスリ

獨逸北部聯邦領事代

エ、イウルフ

伊太利國領事代

エツチゼグルース

長崎在留領事

米利堅合衆國領事

ダフリエピマン

荷蘭國領事

エスビトムブリンク

魯西亞國領事

フキリツペウス

佛蘭西國領事

リョングエリ

葡萄牙國領事

ゼー、ロレーロ

獨逸北部聯邦領事

アムリンドウ

瑞西聯邦領事

荷蘭國領事ヨリ兼帶

丁抹國領事

奥地利國領事	大貌列顛國領事	ヨリ兼帶
佛蘭西國領事代	ゼエツチヂニス	
魯西亞國領事	ヲラロースキ	
ド	ン	
米利堅合衆國領事	ゼエツチチニス	
丁抹國領事	シガルト子ル	

獨逸北部聯邦領事	アルユースデン	
大貌列顛國領事	箱館在留領事	
兼帶		
奥地利國領事	大貌列顛國代辦領事	ヨリ
大貌列顛國代辦領事	エエチチニスリ	
エツチチニス		

新潟在留領事

大貌列顛國領事

セームスツループ

獨逸北部聯邦領事

エ、テ、ライ、ス、子、ル

荷蘭國副領事

メー、ス

外務省日誌

明治四年辛未第三號

至自九月二日

二月二日 洋曆一千八百七十一年第三月廿二日

○荷蘭國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ過日寺嶋閣下へ御面談
ノ節申上候通拙者丁抹國王目代ノ儀ニ候ハ
ハ昨年エツ夫イシツキヲ以テ約定致シ候傳信
機ノ要務ヲ被取扱候貴政府長官迄丁抹傳信
會社ヨリ左ノ贈物進呈致度旨ニテ即右取扱
ノ儀被任候右ハ其惣代スエソシヨリ閣下

等へ差出シ可申候右贈物輕少ノ品ニハ候へ
 共聊貴政府へ拜謝ノ驗迄ニ有之候間御受納
 被下候ハ、傳信會社ニ於テモ難有可存候附
 テハ乍御面倒左ノ品々夫々御分配被下度候
 右可得貴意如斯御座候以上
 外務卿澤宣嘉閣下へ「トル」己ノ「種」一「枚」
 參議副嶋種臣閣下へ「全」時「七」計「二」織「物」反「一」及「工」
 參議大隈重信閣下へ「トル」己ノ「種」
 外務大輔寺嶋宗則閣下へ「全」時「七」計「二」織「物」反「一」及「工」
 反賜一

1020 (YH特製)

千八百七十一年第三月廿二日
 於東京
 エス、ペル、ファン、ドル、フー、フエン
 外務卿
 外務大輔
 閣下
 ○文書大令史彭城中平是迄ノ通り漢語學所教
 佐ヲ以テ當分塾頭兼勤被申付
 ○本省出仕本多阿伎良漢語學所守事兼塾頭被
 申付

○本省等外出仕室田義文漢洋兩語學所掌簿被

申付

三日

○外務卿澤宣嘉外務大丞柳原前光御用有之大

坂出張被仰付

○外務權少錄官木鳴外務權少錄土子豊憲外務

卿外務大丞大坂出張ニ付隨從被申付

○當省附屬山口山三郎伊東鋼造漢語學所掌簿

被申付

○當省附屬堀田銀次郎伊東八三郎洋語學所掌

簿被申付

四日

○大貌列顛國公使館士官ノ來翰并別紙日返ニ翰在七

リ

以手紙致啓上候然ハ我國大砲方士官グリ

夕レト申人此度濱田清藏ト申人ヲ日本學術

師匠トシテ相賴候ニ付橫濱出入鑑札御渡被

下度賴入候尤可相成文早々御許ヒノ程是又

御賴申候右ノ趣可得御意如此御座候以上

辛未二月四日

大貌列顛國公使館士官

ホー
ル

外務大少丞

貴下

尚以テ別紙ノ通りブリンクレ氏ヨリモ申入
候間差上申候御落手可被下候以上

別紙

以手紙致啓上候然ハ拙者儀今般日本學稽古

ノ夕々原田君ヲ師匠ニ相頼申候ニ付右同人

江戸ヨリ横濱へ引移リ候間通行ニ要用ナル

印鑑ヲ同人へ御渡シ被下度願上候以上

1020 (YH特製)

千八百七十一年第三月廿二日

於横濱

セ、ブリンクレ

外務省

御中

五日

○外務少録齋藤知一任外務權大録

○外務權少録官木鳴任外務少録

○文書司出仕副田節任文書少佑

○福島縣管内伊達崎村石幡為貞源本姓一関藩二

橋元長藤本原姓任文書權少佑

○本省出任奥義質任外務史生

七日

○大貌列顛國公使館士官へ返翰

我二月四日附御手紙落手然ハ貴國大砲方士

官ブリンクレ氏此度濱田清藏ト申者ヲ我國

學術師匠ニ被頼候ニ付横濱関門出入ノ鑑札

御請求ノ趣ブリンクレ氏御手紙相添御申越

ノ趣承知致シ候然ル処清藏苗字貴下ヨリ御

申越ニハ濱田ト有之ブリンクレ氏御手紙ニ

ハ原田ト記シ有之何レヲ正ト可致哉且横濱

関門出入文ノ鑑札ニ候ハ、神奈川縣廳へ御

申立御請取有之候方可然存候此段回答可得

御意如此御座候以上

辛未二月七日 外務大少丞

大貌列顛國公使館士官

ホー
ル

貴下

八日

○佛蘭西國公使館士官へ往翰

以手紙致啓上候然ハ貴國商人外國ノ諸港ニ
 於テ他國人ヨリ船買入候節ハ必ズ其賣先ノ
 國ノ領事ヨリ其船賣渡シ故障無之由證書差
 出サセ且貴國領事ニ於テモ其買入タル船ニ
 證書御渡相成候事ト存候且又貴國商人所持
 ノ船ヲ外國ノ諸港ニ於テ他國人ハ賣渡シ候
 節モ貴國領事奥印ノ證書ヲ以テ賣渡シノ證
 書ト被成候事ト存候右等ノ規則貴國ノ國律
 ニ可有之乍御手数數御指示シ有之度則寫取ノ
 上返却可致候此段及御掛合候以上

辛未二月八日 外務大少丞

佛蘭西國公使館士官

ジブスケ

貴下

○横須賀造船所開場各國公使參會饗應有リ

九日

○魯西亞國領事ハ往翰并別紙

以手紙致啓上候然ハ此度我外務省ニ於テ洋
 語學所取開キ生徒教授致シ候ニ付テハ教師
 雇入候儀ニ有之然ル處貴國都府「ペー」トルブ

ルゴノ人ニテシイドル、フド、ロフ、ロツエ、レウイ
 チト申人齡ヒ二十六歳ニテ諸國修行ノ夕メ
 國許發足致シ候旨ニテ我東京ヘモ遊行ノ序
 テ幸ヒ我語學所取開ニ付雇入吳候様申出候
 間一應勘考致シ候處語學モ相應出來候様ニ
 被存候且貴國語學ニ通シ候者之シキ折柄ニ
 付當分雇入別紙ノ通り假リ約定致シ置候貴
 下ニ於テ御異存ノ有無為念承知致シ度否哉
 早速御報被下度右得御意度如此御座候
 辛未二月九日
 外務大少丞

魯西亞國領事

ヲラロースキ

貴下

別紙

假約定

大日本外務省官員外務大丞兼文書正柳原前
 光及ヒ文書權正子安宗峻ト魯西亞人シイド
 ル、フド、ロフ、ロツエ、レウイ、子氏ト双方協議シテ
 假リニ約定スル條件如左

第一條

シイドルフ、ドフロ、ロツェレウイチ氏ヲ雇フハ
我外務省文書司ニ属セル洋語學所ノ生徒ヘ
獨逸并ニ魯西亞等ノ語及ヒ其學術ヲ教導傳
授スル為メ也其學則等ハ都テ語學所督長等
ト談議シテ其差圖ニ順フベキ事

第二條

雇ヒ期限ハ先ツ試ニ九十日ト定ム開業ノ日
ヨリ給料トシテ三十日毎ニ洋銀百七十枚宛
相渡シ九十日ニテ總計洋銀五百十枚相渡可
申事

但毎月語學所休日ノ外自分勝手ニ業ヲ廢
スル時ハ其日ノ給料可引去モシ病氣アリ
テ休業五日已上ニ及フ時ハ前同様タルベ
シ

第三條

期限九十日過テ後ニ其教授ノ勉強效驗アル
時ハ本條約ヲナシ更ニ雇ヒ期限ヲ定ムベシ
ト雖モ或ハ生徒ヲ教育スルニ怠リ或ハ粗暴
ノ所業等ニテ不都合アル時ハ暇ヲ遣ストモ
異論ナカルベシ

但勉不勉ニ不拘期限相過テ後歸國致シ候
トモ手當等ハ不遣事

第四條

開業最初ハ先ツ獨逸語及ヒ其學術ヲ教導シ
其後追々魯西亞語及ヒ其學術ヲ傳授スルヲ
ヲ要ス

第五條

雇中衣服婢僕筆墨紙等ノ費用ハ此方ヨリ供
セザル事

第六條

當省内ニ於テ相應ナル居室ヲ與ヘ或ハ破損
スル節ハ修復ヲ加フト雖モ飲食家財等ノ諸
具ハ與ヘザル事

第七條

我國ノ法度及ヒ我省ノ規則ハ堅ク遵奉シ官
員ニ對シ不敬ノ所業アル可ラザル事

第八條

シイドルフアドフロヴェレウイチ氏万一分
勝手ヲ以テ雇中暇ヲ乞フ時ハ其日ヨリ給料
遣ハサザル事

但已ムヲ得ズシテ此方ヨリ暇遣ス節ハ約
定九十日ノ給料盡ク遣スベキ事

大日本明治四年辛未二月二日

魯西亞千八百七十一年第三月十一日

外務大丞兼文書正 柳原前光 花押

文書 權正 子安宗峻 花押

シイドルフネドロスロツエレウイチ

手記

外務省日誌 明治四年辛未第四号 自三月十二日

二月十二日 洋曆一千八百七十一年第四月一日

○獨逸北部聯邦公使ノ來翰 日返ニ翰在

以手紙致啓上候然ハ獨逸國ト佛蘭西國ト相

結候和穆ノ條約書調印相濟候趣我去ル第三

月四日獨逸皇帝兼孝滿生國皇帝陛下ノ政府

ヨリ拙者ニ吹聴有之候此段閣下ハ為御知申

候右ノ段可得御意如斯御座候以上

千八百七十一年第四月一日

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フオイングラント

外務卿

外務大輔

閣下

十四日

○獨逸北部聯邦公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ我國皇帝此度獨逸皇帝

ノ位ヲ被加候間以來獨逸皇帝兼孛漏生皇帝

ト相稱へ申候右ノ段得御意度如斯御座候以

上

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フオイングラント

外務卿

外務大輔

閣下

○白耳義國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ去ル第一月十九日我國

皇帝陛下評議決定ノ上イランクラブラック氏

ヲ兵庫大坂兩所ノ白耳義領事ニ任シ候ニ付

拙者ヨリ右御案内申上度且閣下ヨリ前兩所
貴國長官へ其旨御通達有之度此段可得如斯
御座候以上

千八百七十一年第四月三日

在橫濱

白耳義國特派全權公使

オーゴスト、スキント、ローデンベーク

外務卿

外務大輔

閣下

十八日

○在大貌列顛國御雇士官バロニ、フオニ、シーボル

トノ來翰並別紙姓名錄

以手紙致啓上候然ハ先便千八百七十年第十

二月廿四日并同月廿八日附兩通ノ書簡ヲ以

申述候儀ニ付英國在留貴國生徒ノ姓名目録

差進申候獨逸ニテ新楮幣製造一件ニ付拙者

不絶英國ニ不居合候ニ付巨細ニ申述候儀出

來兼甚夕残念ノ至ニ存候且千八百七十年第

十二月廿四日附書簡ニ申進置候事情實ニ不

得止儀ニ有之候貴國海軍生徒英國海軍學校
ニ入門ノ儀閣下御希望ノ通英國海軍局ニテ
承引不致儀ハ既ニ第十二月廿四日附書簡ヲ
以申進置候此一件ニ付英國外務局ト海軍局
トノ往復書簡ニ據リ總裁次官ハムモンド氏
拙者ハ面會致シ吳申候間既ニ海軍局ニテ他
國ノ政府則瑞典政府ハ海軍學校ニ人員相滿
居候間右同様ノ儀及斷候次第モ有之候趣ヲ
以テ貴國生徒入門ノ儀被斷候旨同氏ハ相話
シ申候然ルニ瑞典政府ニテ同國士官英國政

府ニテ使用ノ儀願出候由一体閣下ノ御希望
ハ海軍士官ヲ教育致シ候夕メ英國海岸ノ各
港内ハ備置候演習艦ハ貴國生徒ヲ為乘組修
業為致候文ノ事ニ有之候依テ拙者此一件ニ
付申述ル主意ハ悉ク貴政府ノ希望ニ有之候
旨別紙寫ノ通英國外務局ハ申遣シ候尤平人
ニテ設置候海軍學校ハ演習艦ニ乘リ組候以
前修業致候処ニ有之候間貴國生徒モ容易ニ
入門出來可申ト存候生徒右演習艦ニテ所不
學ヲ修業為致候夕メ追テハ右演習艦ヨリ軍

艦ニ乗移リ可申候右可得御意如斯御座候以
上

千八百七十一年第一月十六日

在學國佛良佛

バロニフォニシボルト

外務卿

外務大輔

閣下

別紙

大日本生徒英國政府海軍學校ニ入門ノ儀ニ

付シボルトヨリ英國外務局ヘノ掛合書寫

大日本海軍生徒ノ内英國政府海軍學校ニ入

門為致度旨第八月廿四日并其以前其政府ヨ

リサアハルリトパークスヘ依頼有之候儀ニ

付拙者左ニ申述候

右政府ニテ差向海軍ニ適當ノ士官ヲ教育致

シ候儀最必要ノ事ニ有之候間門地アル人々

ノ内ヨリ幼年ノ者數人撰擧致シ海軍學校ノ

内ニテ一通リ習學ノ上海軍生徒ノ為取設有

之候演習艦ニ乗組セ其生徒自國ノ軍艦ニテ

指揮相勤候様上達致シ候迄ハ英國軍艦ニテ
 修業為致度主意ニテ英國ハ差遣候事ニ決定
 致シ候儀ニ付其願意御承諾被下候ハ、右海
 軍生徒共ヲシテ能英語ニ通ゼシメ且入門ノ
 儀ニ付テハ英國海軍生徒ノ學風ニ依リ算術
 習學相成候迄ハ初學ノ者ハ入校為致置申度
 候右生徒等英國ノ法ニ依レハ年齡既ニ入學
 ノ期ニ過キ候様被考充當時天概十七八歳ニ
 有之候ハ入門ノ序ニ至リ候迄ニハ更ニ加
 齡可致候將又大日本政府ニテハ右生徒等英

國軍艦ニ為乗組候儀御差支ニ候ハ、演習艦
 ハ為乗組度トノ主意ニ有之候尤追テ其生徒
 等右演習艦ヲ離候節ハ別段御処置有之度存
 候當時入門為致度人数ハ六名ニ候ハ共當年
 中ニハ人員必ス増加可致存候右可得貴意如
 斯御座候以上

千八百七十年十一月廿六日

在倫敦

バロニフォニシーボルト

手記

姓名録

當時英國ニ在ル貴國留學生名記

一三條正四位公ハ自分雇ノ教師ト共ニ倫敦ニ

在テ能ク上達ス併シ胸膈虛弱ニシテ英國ハ

冬分氣候甚適宜ナラサルニ困難ス

一中御門寛麻呂公ハ甚勉強當時「ストシ」

於テ醫官スピケル子ルノ海軍學校ニアリ

一森氏ハ英國「ソングリ」ニ在ル「ガピテン」

「シ」ノ兵學校ニアル「既」ニ二年ナリ

一山口藩芳山三郎介儀ハ三年間英國ニ在テ「カ

ンブリー」ジニ在ル「ホワルド」ト共ニ居住ス

一山口藩土肥又一ハ三年間英國ニアリ

一戸田三郎ハ三條正四位公ニ附属ス併シ別居

ナリ

一城連ハ中御門公ニ附属ス

一熊本藩國友次郎ハ同藩ヨリ手當ヲナシ英國

ニ一年半在留當時「ゴスホルト」ニ於テ「バル」ニ

「ノ官」學校ニアリ

一福井藩狛林之助福山藩矢島佐九郎ハ政府ノ

手當ナリ

一 野口友七ハ免許ヲ受テ貌列顛國公使館ノサ
 トウ氏ト同行シ英國ニ來ツテ留リ朋友ノ扶
 助ヲ受ケテ活計ヲ立テ能勉強シ英語ヲ話ス
 一 大村松二郎ハ拙者ト共ニ英國ニ來リ野口ト
 同校ニ在リ右學校賄料ハ一ヶ年七十ポンド
 ニシテ則三百五十ドルナリ併シ小遣金ハ別
 ナリ
 右大村ノ如ク他ノ生徒教育方ヲ注意シ管轄
 スルヲアラハ如何程廉價ニテ修業シ得ルヤ
 貴政府ニテ之ヲ知ルヘシ

一 長府藩 福原和勝ハヨールウキツチニアリ
 一 山口藩 服部一二ハ三ヶ年前ヨリ「ワルセスト
 山ト名クル演習艦内ニアリ
 一 山口藩 河北義次郎同藩天野清三郎ハ二年間
 英國ニアリ
 一 山口藩 藤本盤造ハ三年間英國ニアリ
 一 廣島藩 田口金澤藩不破與四郎高知藩松井正
 水ハ一年半英國ニアリ
 岩瀬屋ハ自分入用ニテ長崎ヨリ來リ一年半
 在留近頃歸國ノ由ナリ

一川瀬ト音見清兵衛ハ英國ニ在レ共教師ニ就

テ學フ事ナシ

尚此他ニ土佐ヨリ來レル生徒多分アリ拙者

今日迄未タ其名ヲ承知不致候以上

バロンフォンシーボルト

十日

○獨逸北部聯邦公使へ返翰

千八百七十一年第四月一日附貴札致被見候

然ハ今般貴國佛國ト被相結候和談條約書調

印相濟候段御吹聽ノ趣致承知候右回答可得

御意如斯御座候以上

辛未二月廿日

外務大輔

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フォン、ブランド

閣下

廿八日

○采利堅合衆國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ拙者神奈川米國領事サ

ミールライラン氏當月六日死去致候段閣下

へ御吹聽申上候拙者左悲歎スヘキ事件昨日

京都ヨリ歸宅ノ後承知致シ候ニ付東京米國
領事館事務ヲ爲取扱候ジラルジユイライス
氏ヲ代辦副領事ニ命シ是迄東京在勤罷在候
我領事シ、フセパルド氏ニ神奈川米國領事
館ノ事務ヲ取扱候様申付候依之此段不取敢
閣下へ御報知申上且セパルド氏ヲ神奈川ノ
領事トシテ差置申候儀速ニ御承諾有之度將
右兩所ノ長官へ右ハ趣急々御下命有之度存
候以上

千八百七十一年第四月十七日

在横濱

米利堅合衆國特派全權公使

チャールズ・ヘンダーソン

外務卿

閣下

廿九日

○大貌列顛國公使ノ來翰 四返日翰ニ三在月十

以手紙致啓上候然ハ先達テ東伏見官殿下爲
修業英國へ御越ニ相成候趣我政府へ申遣シ
候處此度外務大臣ヨリ書狀ヲ以テ申來リ候

ニハ官様御光臨ノ儀我國政府ニ於テ至極致
満足候ニ付御實効被爲立候様御周旋可申旨
貴政府へ可申伸様命ニ越シ就テハ官様御到
著ノ上我國外務大臣早速御尋問致シ官様ニ
於テハ既ニ御參殿ノ上我皇帝陛下へ御謁見
ニ相成候趣ニ御座候此段可得御意如斯御座
候以上

大貌列顛國特派全權公使

二月廿九日 廿アハルリトパークス

外務御

外務大輔

閣下

○同國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ支那并貴國近海出張ノ
我國海軍水師提督サヘンレケレット氏ヨリ此
度書狀差越其趣ニハ北海道測量ノ儀ニ付我
軍艦ヲシルブイヤ同道ノ爲メ適當ナル春日丸
ヲ貴政府ヨリ御差出ニ相成候儀當人ニ於テ
甚満足致シ且ヲシルブイヤ船へ相送り候糧其
外有用ノ品々春日丸ニ載セ被遣同船ノ船將

并士官ニ於テ御親切ノ段感シ入候趣拙者ヨ
リ可申入様水師提督ヨリ頼越シ候就テハ如
此貴政府并貴國士官ニ於テ御焦慮且懇親ヲ
盡サレ候ヲ見レハ双方ノ政府ニテ此度興起
致シ候有益ノ大業必然實効可有之崩シト水
師提督ノ所鑒ニ御座候右ノ趣可得御意如斯
御座候以上

大貌列願國特派全權公使

二月廿九日 廿アハルリ、バ | クス

外務卿

外務大輔

閣下

晦日

○佛蘭西國公使へ往翰

以手紙致啓上候然ハ今般貴國ト獨乙國和談
條約書調印相濟候趣獨乙公使ヨリ千八百七
十一年第四月一日附書翰ヲ以テ申越候然ル
處閣下ヨリ未御報知無之右ハ彌和議御取結
相成候儀ニ候哉及御問合候否御回答有之候
様致度此段可得御意如此御座候以上

辛未二月晦日

外務大輔

佛蘭西國全權公使

マキシムウートレ

閣下

○大貌列顛國公使ノ來翰一返日翰ニ三在月廿

以手紙致啓上候然ハ彌暖和相催候ニ付水師

提督升ヘンレケツト氏其配下ノ内海軍歩兵三

百人ヲエドウエンチヤゴト申海軍附屬ノ船

へ乗組セ香港ヨリ長崎へ相廻シ候旨ニ有之

候固ヨリ長崎滞留ノ儀ハ纔暫時ノ間ニ有之

右同船中始終屯集罷在候儀ニ有之候附テハ

貴國開港場碇泊各國軍艦乗組上陸ノ振合ニ

隨ヒ折節遊歩運動ノ夕ノ上陸致シ即日本船

へ立歸可申候左候ハ、右同船長崎碇泊ノ始

末ハ他ノ軍艦ト相變リ候事ハ無之候へ共万

一同所地方官ニ於テ不審有之哉モ難計候間

前以此段御達有之候様致シ度存候且又右歩

兵隊運動遊歩ノ爲メ上陸ノ節ハ貴國開港場

ニ於テ他ノ軍艦乗組人数ト同様懇ニ御周旋

有之様同所官員へ御申遣シ有之度其砌拙者

ヨリ王同所領事へ申遣シ度候間御下命ノ節
當方へ御沙汰被下度存候右ノ趣可得御意如
此御座候以上

千八百七十一年第四月十九日

大貌列顛國特派全權公使

サズハルリ、パークス

外務御

外務大輔

閣下

外務省日誌辛未第 号附録

米國軍艦朝鮮へ發航ノ事ニ付米公使ノ來翰并

新聞

○以手紙致啓上候陳ハ米國軍艦朝鮮出進ノ事

ニ付落手致シ候新聞紙御約速ノ趣モ有之拜

送候間御落手可被下候朝鮮人我軍艦ニ來リ

首府ニ赴キ并ニ測量ヲナスヲ諾シタルニ

ヨリ其事ヲ始ントセシ時突然我小船ヲ砲撃

シタル共悉ク散乱シ我方ニテハ死亡ノモ

二人傷ヲ負タルモノ數人アリ而シテ右小船

上五艘ノ船第五月十七日同所ヲ進發シ二日
 路ヲ經テ朝鮮ノ南ヲクルリノスアイランツ
 トイヘル島々ヲ見掛夫レヨリ西ノ方へ押廻
 シ同廿日朝鮮國ノ内「セロムゴル」云へル入
 江ニ到着其後十日程ハ島々ノ間ヲ測量シ佛
 蘭西製ノ海圖ニ「イレボイセ」トシルシタル
 場所ヲ碇泊所ト定メ船々此處へ錨ヲ投スル
 間モナク壹艘ノ船陸ノ方ヨリ漕來リ次第ニ
 「コロラド」船ノ側ニ近寄ルヲ見レハ官服ヲ
 着タル人三人程其船ニ乗組居タリ我船ヨリ

同所ニテ「ベニシヤ」アヲスカノ二艘ト會シ以
 ルニ乗「モ」ノカシ「パ」ロスノ三艘長崎へ向ケ出帆
 去月中合衆國ノ軍艦「コロラド」水師提督「レ」
 朝鮮ノ新聞ニ千八百七十二年出版第六月十
 澤宜嘉閣下
 第六月二十日我日五月ニ「六」デロシク
 候委曲ハ新聞紙ニテ御承知可被下候頓首
 ヲ相待候由ナレハ多分戰爭相始候事ト奉存
 テ「ワ」シント「ン」府へ其顛末ヲ報シ以テ其命令
 ハ本船ニ歸リ水師提督「ロ」ツ「エ」ルスハ電信機ニ

王ヨリノ委任狀モ所持無之由左スレハ何分
對面ノ儀ハ相叶ガタシ依之一應立歸リ此旨
貴國政府へ申立ラルベシト申通ス尤今度渡
來ノ次第ハ別儀ニテハナシ貴國ト好ヲ通セ
ンタメナレバ貴國ヨリ事ヲ起サレスハ我々
ヨリハ決シテ害ヲ加へ申間敷穩カニ歸帆致
スヘシ唯望ム所ハ國王歟又ハ其名代ノ人へ
面會致シ兩國ノ間ニ和親ヲ結ヒ度トナリ就
テハ先ツ乗組ノ内数人ヲ遣シ河水ノ淺深ヲ
測量致サセ其上ニテ王城へ罷越シ申度尤今

一等譯司兼九江海關ノ監督トルツト云へ
ル人其船へ到リ暫時應接ノ内三人ノ官人申
様我々ハ國王ノ命ヲ受ケ貴國軍艦渡來ノ次
第ヲ尋ニ來リシ也譯司答テ然ラバゴロラド
「船へ來ラルヘシ委細ノ事ハ同船ニテ物語
リ申サントテ三人ノ官人同道ニテゴロラド
「船へ來ル其趣キ公使并ニ提督へ申入シニ
何レモ官人へ對面ノ儀斷リノ旨申達尚譯司
ヲ以テ我々兩人へ強テ面會セラレントナラ
バ國王ノ名代人ヲ差越サルヘシ足下等ハ國

日ヨリ二日ノ間ハ測量ニ取掛リ申間敷其内
ニ近隣ノ諸民へ軍艦渡來ノ次第ヲ布告シ能
々人心ヲ安セラルヘシト申述タレハ三人ノ
官人申ニハ先々渡來ノ次第承リテ安堵セリ
測量ノ儀ハ此方ニ於テ一向差支ノ筋ナシ此
儀苦シカルマシト申述皆々引取タリ其翌日
即チ第五月三十一日又々外ノ官人提督ノ船
へ來リニ時計ニシテ立歸リ又此日船中へ來
リシ官人ハ都合八人ニテ相應ノ人柄ト見ヘ
タレバ船中不殘見物致サセシニ船中ヨリ立

出ルトキニ譯司ニ向ヒ備々武備ノ嚴重ナル
事深ク驚入タリ殊ニ懇切ノ取扱ヲ受ケ大慶
ノ至リナリト申テ皆々暇ヲ告立歸リタリ備
右ノ官人へモ測量ノ儀如何アルベキヤト尋
シニ是亦苦シカルマシトノ事エエ今ハ心安
シサラバ約束ノ如ク明日ヨリ測量ニ取掛ル
ベシトテ皆々其用意ヲナシ又明レハ第六月
一日早朝ヨリ蒸氣仕掛ノ小船四艘ヲ卸シコ
レニ十二斤ノ大砲壹門宛ヲ備へ艦將ブレ
キヲ頭トシテ惣勢百五十人右四艘ノ小船へ

打乗リ陸ノ方へ潜行タリ是ヨリ少シ下リテ
モノカシ^レパロ^スニ艘ノ軍艦モ出進セリ是ハ
四艘ノ小船ヲ警護ノ爲メ也偕又提督ヨリ頭
立タル人々へ申達セシハ今日測量ノ場所ハ
佛蘭西製ノ圖中ニ^レフリウ^フデセルト云ヘル
河ヨリ取掛リ究テ精密ニ量測シ成丈無事ニ
引取ラレヨ萬一彼方ヨリ手出シ等イタシナ
ハ味方ノ防禦ヲ專一ニシテカマヘテ敵ニ打
勝ント思フベカラズ又敵モシ守ヲ捨テ退ク
トモ是ヲ追フテ陸地へ上ルベカラズ此事固

ク守ルベシト申付ラレタリ斯クテ四艘ノ小
船ハ本船ヲ出テ四里許モ來リシニ河口ニ近
キ一ツノ小嶋アリ此島ノ上ニ臺場ヲ設ケタ
リ此所ヲ通りテ猶三里許河上ニ上リシニ又
一ツノ臺場アリ此ニヶ所ノ臺場ハ何レモ石
造リニテ千八百六十六年佛ト戦争ノ後築キ
シモノト見ヘタリ夫ヨリ又二里許行テ圖中
ニ難所ト記シタル場所アリ此所ニモ臺場ア
リテ大砲ノ数四五十門程備ヘタリ此臺場ノ
上ノ方ニ一ツノ丘山アリ其頂上ハ平坦ニシ

テ直徑四十尺許ナルカ周圍ニハ六尺乃至八
 尺ノ胸壁ヲ築キ中央ニ元帥ノ二字ヲ深拔夕
 ル黄色ノ大旗一流ヲ押立繩筒ヲ携ヘタル兵
 卒共ニ千人許ヒシ々々ト固居タリ斯ク仰々
 シク打構シハ全ク武威ヲ以テ味方ノ者ヲ驚
 シ早々退去セシメントノ結構ナラシサリナ
 カラ先ノ日我船中ニ來リシ官人ノ話ニ測量
 ノ儀ハ苦シカルマジト申タレバ別ニ子細モ
 アルマジトテ次第ニ河上ノ方ヘ汜リ河水ノ
 曲レル所マテ來リシニ此所ニモ又一ツノ臺

場アリ其模様ナド見居タル折一聲ノ砲耳元
 ニ響シカハ備ハ敵ニ害心アリイザ用心セヨ
 ト云フ間モナク右合圖ノ砲聲ヲ聞クトヒト
 シク元帥ノ牙管ヲ始メ其外ノ臺場ヨリ我小
 船へ對シ會釋モナク散々ニ大砲ヲ打掛恰モ
 百雷ノ落ルニ齊シク左右ヨリ飛來ル彈ハ霰
 ヨリモ繁ク面ヲ向ベキ様モナシ斯クテハ壹
 人モ命助カルモノアルマジト思ノ外手疵少
 々受シ者纜カ壹人ノミ實ニ不思議ト云フハ
 シアラスカノ艦將ブレキ云ヘル人ハ先年

リシト見へ今ハ臺場ノ上ニハ人影モ見へズ
元帥ノ牙旗ノミ空シク残り居タリ夫ヨリ樹
林ノ中へ破裂彈少々打込シニ何レモ思フ的
ニ中リシト見エ敵此所ヲモ逃出シ四方ニ散
乱シタリモノカシ船ハ水際ノ所ヲ傷メシト
見エ夥シク水洩入りケレハ早々碇泊所へ引
歸シ又儲又河下ニ残りシ壹艘ノ小船ハ其場
ヨリ直ニ碇泊所へ引返シタラント思ノ外敵
ノ砲火ヲ事トモセズ急ニ河上ノ方へ船ヲ進
メ追々外三艘ノ小船ト會シタリ斯クテ今ハ

南北合戦ノ折度々苦戦ヲモナシタル人ナリ
シガ斯ル烈シキ砲火ニ出會ヒシハ今日ガ始
テナリト申サレキ此時四艘ノ小船ノ内壹艘
ハ四里程モ河下ノ方ニ後レタリシカバ残り
三艘ノ小船各々其船首ヲ臺場ノ方へ押向ケ
思ヒ々々ニ破裂彈ヲ打出シタリ暫クシテ「パ
口」モノカシノ兩船ヨリモ八イシチノ破裂
彈ヲ打掛臺場ノ胸壁數ヶ所ヲ打碎キ又凡十
五分時許過テ敵ノ砲聲モ絶エ烟モ晴シニ敵
ハ防戦不叶皆々臺場ヲ打捨樹林ノ間へ逃入

敵モ散乱シ又レハ最早碇泊所ノ方へ引返サ
ントテ午後三字五十分頃元ノ路筋へ返リシ
ニ何レノ臺場ニモ敵壹人モ見エズ難ナク碇
泊所へ立歸リ又儲始終ノ事共具ニ公使ト提
督へ物語リシニ提督ハ別シテ諸人ノ振舞且
ハ其手柄ノ程ヲ感賞セラレタリ夫ヨリ兵士
八百人大砲八門明日ノ合戦ニ用意スベシト
軍令ヲ出サレシガ尙本國へ問合其差圖ヲ待
ベシトテ此事ハ見合セラレタリ右ニ付華盛
頓へノ書狀ヲ「パロ」口込船へ托シ直ニ支那へ出

帆ノ儀ヲ命セラレ猶歸便ニハ石炭其外ノ軍
用品ヲ積歸ルヘシトノ事ナリ
右書狀ノ大略ハ傳信機ニテモ華盛頓へ申遣
シタレハ大統領ノ返書不日ニ參ルベシ
○朝鮮ヨリ送りタル書簡左ニ出ス
千八百六十八年中貴國人民「フェビ」ダ
ルモノ我國へ來リ一應來意ヲ報ジテ退去セ
リ然ルニ足下ハ何故右ノ例ニ倣ハザルヤ
是ヨリ前千八百六十五年佛蘭西ト唱フル
國ノ人民我國へ渡來シタリ其節ノ始末ハ

死ヲ以テ之ヲ罰セシノミ足下我土地ヲ得
ント欲スルヤ能ハズ足下我ト交ハラシ
テ欲スルヤ是亦能ハザルナリ

定テ足下モ之ヲ聞カレシナレニ抑我國ノ
人民ハ自國ノ教化ヲ享ケ德澤ヲ被ムルモ
ノ茲ニ四千年天下獨リ我國アルヲ知ルノ
ミ故ニ我國ヨリハ曾テ他國ヲ煩ハセシ
ナシ然ルニ他國却テ我ヲ煩ハス是如何ナ
ル道理ゾヤ我國ハ極東ニ位シ貴國ハ極西
ニ位ス足下數千里ノ海洋ヲ越テ來ル不知
如何ナル趣意ナリヤ恐ラクハ先年破却セ
シ船ノ事ヲ問ハンガタメニ非ザルヤ右船
乗組ノ者海賊トナリテ人ヲ殺セシガ故ニ

外務省日誌辛未第五号

往復書翰目錄

一 獨逸公使ヨリ皇帝ノ手書ヲ呈スル夕ノ參
 朝致シ度旨申越來翰并別紙皇帝手簡寫一丁
 一 米國公使ヨリ橫濱在留領事死去ニ付代任ノ
 者ヲ命シタル旨承諾ノ返翰ニ丁
 一 英國公使ヨリ伊豆岬篝火ノ儀ニ付來翰三丁
 一 英國公使ヨリ歸國ニ付參朝致シ度旨并留
 守中代任ノ儀ニ付來翰四丁
 一 英米兩公使ハ海軍術為修業生徒差遣方ニ付

依頼ノ往翰并別紙海軍生徒名前書 五丁

一 米國公使ヨリイノライス氏箱館領事ヲ命セ

ラレシ旨吹聴ノ來翰并別紙領事委任狀寫 六

丁

一 獨逸公使ヘ參 朝日限治定報知ノ返翰 九丁

一 獨逸譯司ヨリ和歌山藩雇教師書記方兵庫ヨ

リ同所ヘ陸行免許請求ノ來翰 十丁

一 米國公使ヨリ森有禮本國ヘ當着政府満足ノ

旨來翰 十一丁

一 米國在留我領事ヨリ給料加増謝詞復翰 十二

丁

一 英國公使ヘ東伏見官殿下英國御在留ニ付懇

篤ノ取扱有之謝辞返翰 十三丁

外務省日誌

明治四年辛未第五号

自十三日 朔日

三月朔日 洋曆一千八百七十一年第四月二十日

○獨逸公使ノ來翰八返日翰在

以手紙致啓上候然ハ我國皇帝陛下今般獨逸
 國皇帝ノ位ヲ被加候ニ付其趣親書ヲ以テ
 天皇陛下へ御吹聽ノ夕メ右親書ヲ
 天皇陛下ノ御手ニ可奉呈旨我國政府ヨリ下
 令有之候間拙者參内被許候様閣下ヨリ御
 願立有之度且其時日爲爲知被下度存候尤別

紙右親書ノ寫譯文共入御覽候右ノ致可得御
意如此御座候以上

千八百七十一年第四月廿日

獨逸北部聯邦代理公使

エムネンブランド

外務卿

外務大輔

閣下

別紙

神惠ニ因テ獨逸皇帝兼孝漏生皇帝タルウキル

ヘム大日本大天皇ニ告ス

獨逸國々ノ諸侯并諸領主等今般余ニ獨逸國
皇帝ノ位ヲ加ヘ國中ノ政權ヲ委子余カ子孫
モ同様永續セシ事ヲ欲ス右ノ如ク各一致シ
テ右爵位ヲ加フルハ全ク余ヲ信用シテ國中
ノ猶盛シナラン事ヲ望メハナリ故ニ余ハ右
諸侯諸領主ヘ之ヲ歡謝ス余ハ右神惠ニ因テ
國帝ノ位ニ昇リ得タル事ナレハ歡喜シテ獨
逸國ノ夕メ余ガ皇帝ノ職ヲ盡サン事ヲ勉ム
ヘシ仍テ今喜ンテ之ヲ
大天皇ト幸ヲ同フシテ貴國ノ安全ヲ懇禱ス

拜具

千八百七十一年第一月二十九日

ウイルヘム手記

フヲニビスマルク手記

二日

○米國公使ノ返翰

千八百七十一年第四月十七日附貴翰落掌然

ハ横濱在留貴國領事サシエールライオン氏

本月六日死去被致候段御報知被成悲哀ノ至

ニ存候右同氏ノ代職トシテシヨセパルド

氏ヲ横濱港領事ニ轉任セシメラルジエ、イ、ラ

イス氏ヲ東京代辦副領事ニ被任領事館ノ事

務被取扱候段御來示ノ趣致了承候右ノ趣其

筋へ通達可及候此段回答如斯御座候以上

辛未三月二日

外務大輔

外務卿

米利堅合衆國特派全權公使

チャールズス、イ、デ、ロ、ン、グ、閣、下

三日

○英國公使ノ來翰廿返九翰日在
 以手紙致啓上候然ハ我國軍艦「シルブイヤ」船
 將シンジヨニヨリ申出候ハ去ル貴國正月廿
 五日夜伊豆岬へ近寄候処同所ノ篝火先前ト
 相變リ候事無之趣ニ候然ルニ右篝火ハ相休
 メ候段貴政府ヨリ公ニ御布告相成其後如此
 依然ト點火有之候テハ神兒元ヲ目的トシテ
 致航行候船ノ夕メ甚以テ危難ノ事ニ候去ル
 巳年十二月十三日ノ貴簡ニテ神兒元ニ假燈
 明臺被取立候旨御申越其後昨閏十月中本燈

1020 (Y日特製)

明臺出來候旨御申越別紙布告中伊豆岬篝火
 以來相休メ候趣掲載有之事ハ御承知ノ事ト
 存候右布告ノ趣閣下ノ御依頼ニ應ニ適ク觸
 示候上ハ固ヨリ船將タル者ハ是ヲ信シ居可
 申附テハ若伊豆岬篝火再燒ニ迷ヒ危難ニ逢
 候者有之候節ハ其貴貴政府ニ歸シ可申候依
 之伊豆岬篝火ノ儀ハ以來決テ點シ申間敷旨
 嚴重御下命有之度存候右ノ趣可得御意如此
 御座候以上

大貌列願國特派全權公使

三月三日

サア、ハルリ、パークス

外務卿

閣下

外務大輔

八日

○英國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ拙者儀貴國ニ於テ我皇
 帝陛下ノ特派全權公使ノ職相勤罷在候事最
 早六ヶ年近ク相成候間今般暫ク暇ヲ得歸國
 致シ度段我政府ハ申立候處許諾有之候ニ付
 來月出帆可致候尤米利堅飛脚船ニテ發足ノ

都合ニ致シ候間其段

天皇陛下ハ御奏聞ノ上御暇乞ノ拜謁御許容

被下候様致シ度就テハ拙者留守中當館ノ諸

事務ハ書史アダムス氏ハ委子候即其職名ハ

我

皇帝陛下ノ代理公使ト相唱ハ申候間此段御

承知有之度右可得御意如此御座候以上

千八百七十一年第四月廿七日

大貌列顛國特派全權公使

ハルリ、パークス

外務卿

外務大輔

閣下

○英米兩公使へノ往翰

以手紙致啓上候然ハ今般兵部省ヨリ海軍術
 為修行別紙名前ノ者來ル十一日出帆貴國へ
 被差遣候ニ付到着ノ上ハ萬端都合能ク充分
 研究ヲ遂ケ候様御懇教有之度候間每度乍御
 手数閣下ヨリ其筋へ御書送相願度可成ハ右
 出立前御遣ニ被下度此段御依頼申候右可得
 御意如斯御座候以上

明治四年辛未三月八日

外務卿

大親列顛國特派全權公使

サスハルリ、パークス

閣下

米利堅合衆國特派全權公使

チャールズ、イ、ダロング

右各通

別紙

佐双左中

山縣少太郎

石田鼎三

右拾二名英國行

志道實一

西村猪三郎

土方堅吉

東郷平八郎

原田宗助

八田祐次郎

赤嶺伍作

伊地知弘一

土師外次郎

右四名米國行

有馬鞆太郎

横井平次太郎

上坂多賀之助

曾根直之進

○米國公使ノ來翰九返日翰在

以手紙致啓上候然ハ本國執政閣下ヨリ今般

ハライス氏ヲ箱館在留合衆國領事ニ命シ

副領事エーシドン氏ヲ免職致シ候段申越候

間此段御知セ申候且ライス氏ノ委任狀差出

シ候間閣下御檢覽ノ上御具存無之儀ニ候ハ
 、御都合次第早速御承諾ノ趣御申越有之度
 候イライス氏箱館港ニ着致シ候迄ハ同氏
 ノ件ナサニライス氏ヲ假リニ箱館代辦副領
 事ニ命シ其事務ヲ為取扱可申候尤右代任ノ
 儀拙者承諾致シナサニライス氏へ同港ノ諸
 務悉ク引渡シ候様同港ノ領事エトシドク氏
 ニ相達シ申候間御都合次第早速箱館長官へ
 小イライス氏其港へ來着致シ候迄ナサニラ
 イス氏ヲ假リニ箱館在留代辦副領事ト被相

1020 (Y II 特製)

心得候様御下命有之度存候右可得貴意如斯
 御座候以上
 千八百七十一年第四月廿五日
 在横濱
 米利堅合衆國全權公使
 チャールズ・イデロング
 外務御
 外務大輔 閣下
 別紙
 合衆國大統領ノ令

余ノ一シ名地出産ノ任ニ堪ヘ且
 善良ナルコトヲ信スルニヨリ議政堂ニテ協
 議ノ上同人ヲ箱館ノ領事ニ任シ他ノ合衆國
 領事及ヒ副領事ノ住居スル場所ヨリハ箱館
 ニ近キ所ノ事務ヲ管轄セシメ共職掌ヲ以テ
 我國法律書ニ掲載セル箇條ニ從ヒ總テノ正
 理威權特許及ヒ權宜ヲ施ス事ヲ委任セリ右
 小イライス合衆國法律ニ因リ別段取極メザ
 ル役所ノ手数料ハ決シテ求ムベカラズ又是
 ヲ受用スルヲ許サス且合衆國ノ旗章ヲ標シ

航海スル船艦ノ船將船司并ニ我國民ニ屬ス
 ル船ノ船司ニ右小イライスヲ領事ト心得ヘ
 キ旨ヲ命シタリ依テ右小イライスヲシテ領
 事ノ職ヲ故障ナク奉セシメ都テ同人ニ相當
 ノ扶助アラシム事ヲ大日本
 天皇陛下其鎮台及其官員ニ懇求ス余ハ
 天皇陛下ヨリ右同様余ニ申越サル、諸員ヲ
 同様取扱フベシ
 於華盛頓府紀元一千八百七十一年第三月
 十五日
 合衆國
 五年
 目九
 余此本書ニ合衆國ノ

印ヲ鈐シ以テ茲ニ手記スルモノ也

ユスガレン下

手記

執政

ファミルトンフス

手記

○獨逸公使へノ返翰

千八百七十一年第四月廿日附貴翰落手致披

見候然ハ今般貴國

皇帝陛下更ニ尊号ヲ被加候ニ付右為御吹聴

貴國皇帝陛下ノ親書閣下御參朝ノ上我

天皇陛下へ被捧度旨貴國政府ノ命ニ依リ右

親書寫御添云々御來示ノ趣致了承候來ル我

十二月西曆第一日御參朝可有之候其

段御承知有之度候尤當日為嚮導我官員閣下

御旅館迄差出可申且御參朝手續前以テ御

打合申度候間來ル我十日午後又ハ十一日午

前ノ内致御面談度十日ニ候ハ、外務省へ御

越被下度十一日ニ候ハ、乍御苦勞拙者迄へ

御來臨所希候此段回答旁可得御意如此御座

候以上

辛未三月八日

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フォン、ブラント閣下

○獨逸譯司ノ來翰十返五翰日在

以手紙致啓上候然ハ我國人カツピン氏兵學

教師トシテ和歌山藩ニ罷在此度我國人ベル

ムト申者ヲ其書記方ニ雇ヒ同人近日飛脚船

ニテ横濱出帆兵庫へ罷越夫ヨリ陸路ヲ經テ

和歌山藩へ趣キ度旨ニ付右陸行ノ御免許證

書早速御渡被下度相願候此段得御意度如此
御座候以上

千八百七十一年第四月廿七日

ケンパルマン

九日

○米國公使へノ返翰

千八百七十一年第四月廿五日附貴翰落手然

ハ今般ムイライス氏ヲ箱館在留貴國領事ニ

被命右御委任竊被差示且副領事エーシドン

氏免職相成候旨及ヒライス氏箱館港へ到着

迄ハ同氏ノ子息ナサシラハ氏假ニ代辨副領
 事被任候趣等御申越委曲致承諾候右ノ趣箱
 館官府へ速ニ可申通候此段回答如斯御座候
 以上
 三月九日
 外務御
 米利堅合衆國特派全權公使
 チヤールズ、イ、テロング閣下
 十日
 ○米國公使ノ來翰
 十日返五翰日在
 以手紙致啓上候然ハ米國郵船入港本國宰相

1020 (YH特製)

ヨリ書翰到來合衆國在留
 天皇陛下ノ代理公使森從五位有禮氏華盛頗
 府へ無事御到着ノ趣申越候扱今般右森氏御
 差遣シノ儀米國政府ニ於テ大ニ満足ニ存候
 旨本國宰相ヨリ閣下へ可申上様且右御重任
 相當ノ敬禮相盡シ可申旨申越候右可得貴意
 如斯御座候以上
 在横濱
 米利堅合衆國特派全權公使
 チヤールズ、イ、テロング

外務卿
外務大輔

閣下

十二日

○米國在留領事ノ復翰

明治四年正月三十日附ノ貴翰慥ニ致落手候

然ハ拙者儀向後一ケ年二千元ノ給料被下置

候様貴政府ヨリ被命候旨御申遣被下委細致

承知候且六ケ月分ノ為替手形御廻シ被下正

ニ落手右請取書ハ貴簡持參致吳候村田權大

録ハ托シ遣シ申候右ハ「カルホルニヤ」ニ於テ

拙者貴國領事ノ職掌ヲ以テ貴國人民ノ夕メ
精勤致シ候ニ付右ノ通給料加増被仰付候段
云々御教示ノ旨厚ク致感謝候乍憚貴政府ハ
宜ク御傳致被下度相願候尚此上精々勉勵勤
任可致候此段貴答旁申入度如此御座候以上

千八百七十一年第五月一日

合衆國「カルホルニヤ」在留

大日本領事

千ルレス、ウホルコットブル | ク

外務大少丞

貴下

十四日

○外務少丞水野良之加州表御用濟歸府

○英國公使へノ返翰

御手紙致拜見候然ハ先般東伏見宮殿下為修

業貴國へ相越參内ノ上貴國

皇帝陛下へ謁見相濟候旨尤同人貴國到着ノ

節外務大臣乘早速御尋問被下修行ノ實効相

立千候様御周旋可被下旨今度貴政府ヨリ御

申越有之候條縷々被申越致承知則我

1020 (YH特製)

天皇陛下へ及奏聞候處段々御懇篤ノ御取扱

ヒ我政府ニ於テ辱ノ被存候猶此上萬事御周

旋ノ程御依頼申候間閣下ヨリ貴政府へ猶又

宜敷御通達有之度右回答旁此段可得御意如

此御座候以上

辛未三月十四日

外務大臣
外務卿

大親列顛國特次全權公使

サズハルリパークス閣下

